

## 研究発表要旨

## 『Oscar Wilde における「嘘をつくこと」と「芸術」』

大 曲 陽 子

(東海大学講師)

*The Decay of Lying* は、1889年1月、*The Nineteenth Century* 誌に発表された。Peter Reby が著書 *Oscar Wilde* の中で「ワイルドの批評は、本質的に芸術家としての自分を表している。」と語っているように、この作品は *The Critic as Artist* と並び、批評そのものを高めた作品であり、また批評を通しての芸術家ワイルドが評価された作品である。

2人の対話形式というこの作品の中で、まず Vivian が自分の論文に、「嘘をつくことの衰退、一つの抗議」という題をつけたことを述べる。「嘘をつくこと」の真意について理解できずにいる Cyril に対して、Vivian は様々な説を論じ始める。“What we have to do, what at any rate it is our duty to do, is to revive this old art of Lying.” と述べて、自分自身を含む当時の芸術家たちに鋭く問題を提起し、“We must cultivate the lost art of Lying.” と続ける。そして Vivian が最後の啓示として “Lying, the telling of beautiful untrue things, is the proper aim of Art.” (「嘘をつくこと」、つまり美しい事実でないものを語るこそ「芸術」本来の目的である。) と語るこの言葉こそ、この作品の主題といえるであろう。Wilde のいう「嘘をつくこと」とは、「芸術」と同義語なのである。

さて、その Wilde が *The Decay of Lying* の中で、「嘘をつくこと」すなわち「芸術」を、多く別の言葉で表現しているが、それを幾つか挙げて考えてみたい。

## ① 「詩」(poetry)

Lying and Poetry are arts — arts, as Plato saw, not unconnected with each other and they require the most careful study, the most disinterested devotion.

## ② 「仮面」(mask)

In point of fact what is interesting about people in good society ... is the mask that each one of them wears, not the reality that lies behind the mask.

## ③ 「架空」(unreal, non-existent, fiction)

Art begins with abstract decoration, with purely imaginative and pleasurable work dealing with what is unreal and non-existent.

## ④ 「誇張」(exaggeration)

Art itself is really a form of exaggeration.

## ⑤ 「空想」(fancy)「ロマンス」(romance)

Facts are not merely finding a footing — place in history, but they are usurping the domain of Fancy, and have invaded the kingdom of Romance.

以上5つに次の2つを加えて結論に結び付けたい。そのひとつめは「美」(beauty)である。

One does not see anything until one sees its beauty. Then, and then only, does it come into existence.

即ち「美」を見ることができるのは、物事があるがまに見なかったときだけであると言えるのではないか。

さて、最後に取り上げるべきは、やはり“imagination”であろう。

when Art surrenders her imaginative medium she surrenders everything.

The imagination is essentially creative, and always seeks for a new form.

などと言うように、作品中 Wilde が imagination について言及している箇所は多いが、Richard Ellman も “the imagination is itself too natural, too involuntary, for his view of art.” と、述べて Wilde における imagination を重視している。

Wilde は “No great artist ever sees things as they really are.” (大芸術家は決して物事を在るがままには見ない。)と語ったが、物事を在るがまに見ないためには、この “imagination”こそ必要なのではないだろうか。つまり Wilde にとっての「嘘をつくこと」=「芸術」の基盤は imagination であり、*The Decay of Lying* の中で「嘘をつくこと」の重要性を描いた Wilde にとって、「嘘をつくこと」こそ自らの imagination の源泉だったと言えるのではないだろうか。

## 講演要旨 ワイルドの批評とイエイツ

高 松 雄 一

(駒沢大学教授)

イエイツは『自叙伝集』のなかで、若いころワイルドの自宅に招かれ「嘘の衰退」のゲラ刷りを見せられたことにふれてから、著作はウィットのほかはあまり感服しないが、人間は称賛に値いすると述べている。1895年の裁判のとき、国外に逃げようとすれば逃げら